

小児心身症の背景としての親(父)子関係

— 家族関係インヴェントリー (FRI) の検討 —

鈴木 榮 (名古屋大学小児科)
小崎 武 (")
久世 敏雄 (名古屋大学心理学科)
小嶋 秀夫 (")
宮川 統司 (")

第1期の本研究班における研究では、小児心身症の背景としての親子関係の調査には、family relation inventory (FRI) がかなり有用であることが分かったので、今後はこれを完成させると同時に、親の日常生活調査を実施して、本症患者の両親像の特徴をさぐりたいと考えている。

I. 家族関係インベントリー (FRI)

第1年次には、幼稚園児、小学校児童、中学校生徒の両親について本テストを実施し、いわば本法の標準化を行なう。

次にその結果と心身症患児のそれとを比較し、疾患群と健常対照群とを識別する方法をさぐる。

さらに同一症例について反復してテストを実施し、症状の経過との関係をしらべる。

最終的には、以上の結果をふまえて、本法使用の“手引き”を作製し、小児科医の本症診療に使用して頂けるようにしたい。

II. 日常生活を通しての両親像調査

以前に現行のいろいろな家族関係テストを実施した際に感じたことは、このようなテストの際にはどうしても“身構える”ことは避けられず、その結果の信頼度にも影響することになるという点であった。

そこで、直接的な関係のない質問項目から両親像がさぐれないものかと考えて、本調査の実施を

思い立った。

方法としては、アンケート(面接も加えた方がよいかもしいれない)によって、出来るだけ詳細に両親の日常生活(個人歴を含めて、生活時間、趣味、社会活動への参加状況など)を調査し、これらを解析することによって両親像を求め、さらに日常生活の場での両親の力関係(バランス)をさぐりたい。

以上から、小児心身症増加の背景を解明し、本症の診断、治療に役立つFRIの完成までもって行きたいと考えている。

昭和58年度研究報告

われわれは小児心身症発症の背景をとらえるために、家族関係の諸側面を、父母の報告を通して捉える質問紙(FRI)の検討を続けているが、今回は、従来の病院群に加えて、標準群(幼児～中2)の両親610組の資料を得て、病院群と比較してみた。病院群の特徴は、両親ともに子どもについての不安が強く、自信をもって子どもを統制出来ず、そして子どもの年齢の増加とともに低下する傾向のある不安が、病院群では高いままにとどまっていた。これは両親の役割を考える上に重要な知見である。現在、FRIの結果を小児心身症の治療・指導の一助とし、また症例研究を通じて小児心身症の家族背景に関する情報を蓄積しつつある。